

第6章

発掘調査中の生活 ともに語らい、ともに学ぶ

発掘調査中は団員全員が、武威市内の同じ宿舎に泊まりました。朝・昼・晩の3食は宿舎でとる場合もあれば、近くの市場で食べる場合もあります。

1日のスケジュールは、朝8時に宿舎を出発し、昼12時近くまで調査・作業します。甘粛省では昼休みが長く3時間ほどあるので、いったん宿舎にもどって昼食をとったり、昼寝をして午後の作業に備えたりします。灼熱の砂漠での作業では、思った以上に体力を消耗しますので、十分に休息をとることが欠かせません。午後の仕事は3時から始まって、だいたい6時には終わりますが、夏場は明るいので7時くらいまでやることもあります。また、貴重な文物が出土した場合には、盗難防止のため、遺跡に泊まり込んで番をすることもあります。



羊を追い立てながら現場へ向かう



車中はギョウギョウ。凹凸道はツライ。



現場に集まる近所の子供も興味津々...



休憩中は一眠り...



墓道で「はい、チーズ」



現場泊まり込み用のテント設営



砂漠に積もる雪

砂漠の夏がとても暑いのは当然ですが、冬は肌を切る寒さで、雪まで降り積もります。そのため気候に合わせて、暑い日はTシャツや支給された作業服、寒い日は分厚い防寒服を着込みます。



寒い日は秋田から持ってきたナイロン製のつなぎと首巻きタオルが役立ちました。



発掘用の機材です。日本製のものと中国製のもの。団員だけでなく、道具も日中交流しています。



上の写真は遺跡の脇にある農家です。発掘に参加して頂いた方々が住んでいます。下の写真は牛で畑を耕す農家の方。数千年も変わらぬ風景がここには残っていました。



発掘調査中のお弁当。実は中国ではあまりお弁当を食べる習慣がないようで、団員の間ではちょっと不評だったようです。



秋田県・甘肅省文化交流県民の翼

合同発掘調査の現場を何とか秋田県民にも見てもらいたい、甘肅省をもっと知ってもらいたい、との思いが、秋田県・甘肅省文化交流県民の翼になりました。

県民の翼は、平成16年8月1日から1週間の旅程で、チャーター便による甘肅省への県民ツアーという形で行われました。約180名の方々が参加され、一般の外国人観光客では立ち入ることが難しい中国の発掘現場を見学することもできました。ほかにも、うわさの「蘭州牛肉めん」を味わったり、迫力ある石窟寺院を見学したりするなど、雄大な中国の文化や歴史に触れることができました。



磨嘴子遺跡にて



新石器時代の墓地を見学



炳靈寺石窟にて

第7章

発掘調査の成果 言葉の壁をこえた熱い交流

外国で発掘調査するという事は、いろんな意味で貴重な経験です。まず、お互いに言葉がわからない。だから一所懸命勉強しますが、少ない時間では限界があります。でも、日本と中国、同じ考古学を志す者同士が集まれば、言葉の壁は意外と低いものだと実感します。ともに汗を流し、砂にまみれ、考古学を語らう。そこには言葉の壁を越えた、熱い交流がありました。合同発掘調査の一番の成果は、そのような人と人との交流にあったといえるでしょう。

つぎに考古学的な成果を見てみましょう。新石器時代の調査では、河西回廊で約4,000年前の集団墓地のみならず、集落と考えられる範囲を確認しました。これまで、河西回廊では別々の場所で集落と墓地が発見されていましたが、磨嘴子遺跡では同じ場所に生と死の空間があった可能性が高まりました。当時の生活や社会のあり方を解明するために大きな一石を投じたといえるでしょう。

漢代では、土洞墓という中国独特の墓を調査することができました。墓主である中・小地主の威厳に満ちた裕福な荘園生活を反映した土洞墓では、夫婦が一緒に埋葬されている例が多くありました。新石器時代では夫婦で埋葬された例がないことから、価値観の大きな変化があったのでしょうか。集落もまったく別の場所にあったのでしょうかから、約2,000年の間に新石器時代とはまったく異なった社会がそこに出現したのです。

乾燥地帯であるため、さまざまな副葬品が良好な状態で出土したことも大きな成果です。今後、これらの副葬品を研究することにより、当時の葬送儀礼や死生観が明らかになることのみならず、シルクロードにおける交流・交易の実態を知ることできるでしょう。

秋田県から遠く離れた地で行った合同発掘調査は、県省それぞれに得るところが多くありました。ここで築いた県省の絆は将来のさらなる友好的な関係の土台となることでしょう。

